

授業の質を高める

教材研究が命

授業の質を高めるのは、授業者の教材についての造詣の深さと教材に対する愛着の深さです。教材研究には、教材内容を分析して理解を深める段階と、その結果から本質を絞り込み、捨てる解釈の段階とがあります。

教材の本質とは、文学的文章なら主題であり、それを紡ぎ出している人物の言動のキーワードです。説明的文章なら筆者のメッセージであり、筆者の意図やものの見方・考え方であり、それを支えるキーワードです。

授業者が、次のことを考えていくことが、授業の質を高める最大のポイントであり、授業改善へ向けての確かな道標となります。

〈教材解釈〉

- この教材のよさ・本質はどこにあると思うか。
- この教材をどれだけ好きになるか。
- 教材分析の結果と学級の子どもたちの読みの実態から、何をどのように絞り込んでいけば、子どもたちの概念を砕き、表象化して確かな読みに深めていくことができるか、指導内容をどう重点化するか、枝葉末節は捨てるか。

〈授業研究〉

- どのような学習課題や発問を組み立てていくか。
- 教材解釈の結果をもとに、限られた時数の中で、教材の本質に迫る授業にするための設計図（授業案）をどのように構想していくか。

教材研究の中で取り上げた事柄については、一つ一つに愛着があります。そこで、授業の中では学習者の興味・関心などは顧慮せずに、あれもこれも取り上げるということになりがちです。その結果、授業が知識注入型で平板なものになってしまう危険性が出てきます。大切なのは、教材研究で取り上げた事柄をどのように捨てるかということです。

学習者の側に立てば、学習内容として取り上げる場合、できる限り精選したほうがよいでしょう。なぜなら、子どもたちの主体的な学習活動の展開が可能になるからです。教えない技術の方が教える技術よりもはるかに高度なものと言えるのではないのでしょうか。

教師に求められる役割

子どもは一生懸命に考えています。胸の中にある、かすかなことを探り出そうとしています。そして稚拙ながら自分の言葉で表現しようとしています。ところが、多くの場合、未熟さ故に表現しきれないでいます。もどかしさを感じています。

もしそのことを教師がしっかり受け止め、理解し、もどかしさの在りかに気づかせ、返して考えさせることができれば、子どもはぐんぐん学んでいきます。そんな子どもの期待に応えることができれば素晴らしいと思います。

それが教師に求められる役割なのではないのでしょうか。子どもを瞬時に理解する教師でありたいと思います。子どもに考えさせ育てる教師でありたいと思います。そのために修養を積む教師でありたいと思います。

授業が変われば、子どもが変わります。子どもに力がついていきます。すべては、教材の本質に迫る教材研究、教科の本質に迫る教材研究にかかっています。